

## 「物語二百番歌合」試論

—本歌取りの手法にみる共時性を端緒として—

山本美紀

### 要旨

本歌取りを得意としていた藤原定家は、本歌を巧みに想起させるように本歌取りの歌を創作している。一方で本歌との違いを明かにし本歌取りの歌と本歌とが別の歌であることを示している。それにより、読み手は本歌と本歌取りの歌を同時に見ることとなり、読みを干渉させることができる。「物語二百番歌合」はその本歌取りの手法のように、もととなる物語と、その物語から選ばれた歌からなっている。共時にあることで読みを干渉させようとしているのである。ただし、歌と、その歌に付せられた詞書によってひらかれる物語は、同一のことばで記されながらも、歌によってひらかれた物語であるという点で異なるものであ

る。そして、異なるがゆえに見えなかった、あるいは見えにくかった新たな可能性を見せている。本論では、「物語二百番歌合」の後半部である「後百番歌合」のひとつの番を考察対象とし、その可能性について検討している。

キーワード…作成の順序、共時

—

藤原定家は本歌取りの名手と言われている。本歌取りは先人の作の歌語などを自らの歌に取り入れて作歌する和歌の表現技巧である。たとえば、次のような作品があげられる。<sup>〔1〕</sup>

昨日今日雲のはたてにながむとて見もせぬ人の思ひやはし  
る  
(風雅和歌集・恋一・九六四・藤原定家)

夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を恋ふとて  
(古今和歌集・恋一・四八四・読み人知らず)

前者の定家の歌は、後者の古今和歌集の歌を本歌として  
いる。定家は本歌取りの心得について、この古今集の歌を  
例にあげて次のように示している。

本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじきにて候。  
そのやうは、詮とおぼゆる詞二つばかりにて、今の歌  
の上下句にわかち置くべきにや。たとへば、「夕暮れ  
は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」と  
侍る歌を取らば、「雲のはたて」と「物思ふ」という  
詞を取りて上下句に置きて、恋の歌ならざらぬ雑・季  
などによむべし。  
(毎月抄・五〇二頁)

示されているように、古今集の歌から詞を二つばかりと  
り、詞を上下句に置いて定家の歌が成っている。本歌取り  
の歌は本歌を想起させる。まず、古今集の歌は「ものぞ思  
ふ」と「あまつ空なる人」という表現により、高貴な身分

の人を恋慕する人物の歌だということがわかる。その思い  
の行方は「夕暮れ」という太陽の沈み行く時を表した語や、  
「雲のはたて」という遠くを表す語が暗示している。つま  
り、この恋は身分の違いにより叶い難いということだろ  
う。それを本とした定家の歌は、雲のはたてをながめたた  
ころで、「思ひやは知る」と自身の思いが知られることは  
ないと思いつつも、知って欲しいとのかすかな願望をも含  
んだ歌となっている。なぜ知られることはないのか。それ  
を補うのは古今集の「あまつ空なる人」との語であろう。  
恋する相手は高貴であるから、自分の思いなどには気づき  
はしなれないと思うのである。定家の歌は、古今集の歌を想起  
することで恋心の所以を感じさせ、さらにその思いの強さ  
を増すのである。

本歌があつたからこそ本歌取りの歌はなる。ただし、当  
然のことながら本歌と本歌取りの歌は別の歌である。現に  
ふたつの歌は、単独でも充分に歌として読むことができ  
る。本歌取りの巧みな手法により、本歌取りの歌は本歌を  
思い起こさせる。しかしそれは一方で、本歌取りの歌がひ  
とつの歌として独立していると捉えにくくさせているとも  
言いえよう。これは、本歌取りの歌に本歌の読みを付与し  
てはいけないと言ふことではない。本歌は想起されるよう  
に意図されて作られているし、その想起した歌の読みを付

加することで本歌取の歌の読みは深まるからである。しかし、本歌と本歌取りの歌は別の歌である。

それは、本歌取りの歌を読む時には、それぞれに読みを有する本歌取りの歌と、本歌のふたつの歌が、同一時に存在しているということを示す。ふたつの歌は同じ時に現れ、差異や変化を見せる。本歌取りは共時性を有していると言えるのだ。そしてそれは、歌の成立の順序が無効になることを意味している。

歌が共時するということは、本歌と本歌取りの歌の読みが交錯するということを可能にする。言い換えると、本歌の読みが本歌取りの歌の読みへと付与されるように、本歌取りの歌の読みが本歌の読みへと付与されるということである。ふたつの歌が同時にあれば、そこには作用が生じる。それは、それぞれの読みを交わらせるということではないだろうか。

例えば次のような鑑賞も可能になろう。定家の歌の初句には「昨日今日」という歌語がある。それは恋をしたのが昨日今日なのか、あるいは、昨日今日と雲のはたてをながめているということになろう。どちらであったとしても、昨日以前には恋をしておらず、雲のはたてもながめていないのだ。言い方を換えれば、この熱情は最近の出来事となる。そうであるから、「思ひやは知る」なのである。昨日今日

の出来事であれば、自分ですら自覚したのは最近である。そうであるのに、相手がわかるはずはない。そして、この読みを抱えて古今集を読んでみると、雲のはたてに向かつて思う「もの」は、自分の恋心を知っているだろうかとの思いとも解せ得よう。古今集だけでは図りかねたその「もの」が、定家の歌と同時にあることで、「恋心を知っているだろうかという思い」との、ひとつの可能性を持たせることになるのである。定家の歌が古今集に新しい読みを付与したことになりはしないだろうか。

また、次のような可能性も指摘されよう。定家の歌では、「雲のはたて」を「昨日今日」ながめたところで、「見もせぬ人の思ひやはしる」なのである。「見もせぬ人」は「見てもない人」であり、それはつまり、まだ知らない未来の自分の思い人であるとも言えよう。見も知らぬ人であるから、「思ひやはしる」のは当然である。そしてそれは、「昨日今日」「雲のはたて」をながめたところで、知れるはずもない。この歌は年若いまだ恋を知らない人物の歌のように読み得る。そのように読んだとすれば、同時にある古今集はどうであろうか。「雲のはたて」をながめている。そして、「あまつ空なる人を恋ふとて」「ものぞ思」っている。この場合の「もの」は「あまつ空なる人」への恋心であろう。定家の歌と同じように「雲のはたて」をながめながら

も、こちらは恋する相手が連想されているのである。この歌は恋をしておりその思いに悩む人物の歌である。この二首が同時にある時、これらはとある人物の、恋を知らなかつたかつての歌と、恋を知つたその後の歌のように解することができるのである。

この二首が様々な展開を見せるのは、二首がそれぞれに独立しているからである。独立しているからこそ、その一首だけでも読むことができ、二首になつても読むことができる。そしてその読みは、決定されるものではない。歌は読み手に合わせてかたちを変える。言い換えれば、歌の読みは読み手に委ねられているのである。作者の好意によつて、読み手は歌を解し得ていると言つてもよいだろう。その信用の前に、作成の前後は強い意味を有しないとは言えないか。前の成立であつても後の成立であつても、同時にそこに現れたならば、読み手はそのひとつひとつに向き合うだけである。

## 二

前と後に作成された作品同士の同時出現は、本歌取りに限らない。同じく藤原定家が創作した作品に、「源氏物語」や「狭衣物語」などの物語から歌を撰んで番えた「物語二

百番歌合」がある。前に作成されたのは物語である。その物語から歌を撰んで創られた歌合が「物語二百番歌合」である。その性格上、歌の元来の所収先である物語が着目されがちであり、これまで本歌取りの手法を始原とした研究はなされていない。歌の前に付された詞書が、物語に最初に目を向けさせる一助になつていゝであらう。それぞれの歌の前にはその歌が収められた物語の前後の場面を示した詞書が付されている。それは歌の所収元を探すための手助けである。詞書があるから物語の場面を想起でき、歌と物語を一緒に味わえるという「物語二百番歌合」の特徴を支えている。

しかし言い換えれば、詞書があるために歌が歌だけであることを忘れさせてしまつていゝかもしれない。より言うならば、詞書があるために歌の所収先が想起され、所収先が想起されることで、「物語二百番歌合」の歌は物語から抜き出された二次的なものとして捉えられかねないということである。

もちろん、物語を想起することは、詞書がある以上、許されていゝよう。注意しなければならぬのは、想起された物語は歌を撰ぶ段階でひもといた物語とは別の物語であるということである。なぜならば、その物語は「物語二百番歌合」の歌に付されていた詞書によつてひもとかれた物語

であり、物語歌を読むための物語であるからである。強い言い方をすれば、歌が収められていたものと物語は、「物語二百番歌合」を見た時にすでに失われており、読み手は元初の物語へは還ることはできない。それでも、そのどちらの物語も、記されていることは同一である。そうであるが故にどちらの物語であっても「物語二百番歌合」の歌が所属するのに不都合がないのだ。

だが、ことが同一であっても、位相は異なる。詞書の意義に則るならば、詞書によって想起された物語は「物語二百番歌合」の歌を読むための物語である。物語が歌によってひらかれていると言ってもよいだろう。これは決して、物語と「物語二百番歌合」の歌の成った順序の逆転ではない。「物語二百番歌合」を見ている今の時点において、物語と「物語二百番歌合」の歌は前後という概念にあてはまらないということである。「物語二百番歌合」は、歌を物語から抄出させ、なおかつ、物語を歌によってひらかせている。それぞれの位相は全て異なり、共にありながらもそれぞれが独立している。それぞれが独立していることが示すものは、「物語二百番歌合」の読み手は、物語と「物語二百番歌合」の歌の中心に位置し、かつ左歌と右歌の中心に位置しているということである。中心は、どのような事に物にかかわることも、寄りかかるともない位置であり、

読み手が見るべきは左右の歌そのものとその歌がひらく物語、そしてそれらの相互作用ではなからうか。

### 三

作成の前後の問題としても一つ取り上げるべき点がある。「物語二百番歌合」は、二つの歌合からなっている。「源氏物語」（左方）と「狭衣物語」（右方）の歌を番えた「百番歌合」と、「源氏物語」（左方）と「寝覚」等の物語（右方）の歌を番えた「後百番歌合」である。そのうち、「後百番歌合」については、散逸物語を多く含んでいる。「後百番歌合」右方の物語は、「寝覚」、「御津浜松」、「参河爾左介留」、「朝倉」、「右毛左毛袖奴良須」、「心高幾」、「取替波也」、「露宿」、「末葉露」、「海人苺藻」の十物語である。この中で、現存本文から「物語二百番歌合」に撰ばれた歌を探索し得るのは「寝覚」と「御津浜松」、「取替波也」の三物語だけである。「後百番歌合」の歌をまとめると次のようになる。それぞれの物語ごとに、巻名、「物語二百番歌合」に採用された歌数、物語巻内における全歌数を示した。ただし、「参河爾左介留」以下は散逸のため、全歌数を省略している。

## 源氏物語

卷名	所収数	全歌数
桐壺	3	9
帚木	2	14
空蟬		2
夕顔	4	19
若紫	3	25
末摘花		14
紅葉賀	3	17
花宴	2	8
葵	4	24
賢木	6	33
花散里	1	4
須磨	10	48
明石	7	30
滂標	2	17
蓬生		6
関屋		3
絵合	1	9
松風	1	16
薄雲		10
朝顔		13
乙女	2	16
玉鬘		14
初音		6
胡蝶		14
蛩		8
常夏		4
篝火		2
野分		4
行幸		9
藤袴		8
真木柱	3	21
梅枝		11
藤裏葉	1	20
若菜上	3	24
若菜下	2	18
柏木	1	11
横笛	1	8

鈴虫		6
夕霧	2	26
御法	1	12
幻	5	26
匂宮		1
紅梅		4
竹河		24
橋姫	2	13
椎本	3	21
総角	4	31
早蕨	3	15
宿木	5	24
東屋	1	11
浮舟	8	22
蜻蛉	2	11
手習	2	28
夢浮橋		1

## 〔寝覚〕

卷名	所収数	全歌数
卷1	3	18
卷2		15
卷3	3	13
卷4		18
卷5		15
散逸	14	

## 〔御津浜松〕

卷名	所収数	全歌数
卷1	8	35
卷2	4	29
卷3		20
卷4	1	22
卷5		19
散逸	2	

## 〔参河爾左介留〕

卷名	所収数
散逸	10

## 〔朝倉〕

卷名	所収数
散逸	13

## 〔右毛左毛袖奴良須〕

卷名	所収数
散逸	10

## 〔心高幾〕

卷名	所収数
散逸	10

## 〔取替波也〕

卷名	所収数
卷1	1
散逸	5

## 〔露宿〕

卷名	所収数
散逸	5

## 〔末葉露〕

卷名	所収数
散逸	3

## 〔海人苺藻〕

卷名	所収数
散逸	3

散逸物語を多く含む「物語二百番歌合」は、散逸物語の補助資料としても重宝されており、「風葉和歌集」と並ん

で詞書などから散逸箇所を推測がされている。いわば、後に成った「物語二百番歌合」が、前に成った物語を補完し

ているのである。もちろん、散逸することなど想定範囲外であろうし、失われてしまうことは仕様のないことである。しかし、「物語二百番歌合」がなければ物語の散逸箇所は推測すらできないものとなったことは確かであり、物語によって「物語二百番歌合」が成立したように、「物語二百番歌合」によって物語は修繕されるのである。

だが、それはあくまでも「物語二百番歌合」が起こした意図せぬ成果であり、「物語二百番歌合」を読んだことではない。「物語二百番歌合」を読む方は、前にあげたように左右の歌そのものとその歌がひらく物語、そしてそれらの相互作用であろう。歌によって物語が開かれるからこそ、読むことができる物語もある。散逸してしまい、現在では見ることの叶わない「後百番歌合」の右方の物語はその一例になりはしないだろうか。

「物語二百番歌合」の最後に撰ばれている物語は「海人荊藻」である。「海人荊藻」の歌は「後百番歌合」の九十八番、九十九番、百番の右歌として撰ばれ、その全てが現存本文にはないものである。<sup>5)</sup>

「海人荊藻」は平安末期の作であると推測されている。それは、前にも述べたように、「物語二百番歌合」や「風葉和歌集」、その他の文献などによる校合によって得られた情報である。文献のひとつに定家の妹である藤原俊成女

による「無名草子」があり、それにおいて「海人荊藻」は、「しめやかに艶ある所はなければども、言葉遣いなども『世継』をいみじく真似びてしたたかなるさまなれ。物語のほどよりは、あはれにもあり。」(八九頁)と評されている。<sup>6)</sup>「したたか」が悪評なのか好評なのかは判断しかねるが、その後に「あはれにもあり。」との評も書かれているため、それに類する程度のものであるということは言えよう。

また、「海人荊藻」の特色として、「けり」の使用がほとんどないことが指摘されている。さらに、悪役不在と主人公不在との指摘も注目すべき点であろう。<sup>8)</sup>ただ、物語が現在形で進み、悪役も主人公もいない「海人荊藻」は変わればえのない、平凡な物語と捉えられやすい。

そのような「海人荊藻」は、「物語二百番歌合」の中では次の三首が「源氏物語」の歌と番えられている。<sup>9)</sup>

九十八番 左同 右海人荊藻

左 六条の院の春の大殿にて人々鞠もてあそびけるに、心よりほかの御簾のひまより女三の宮を見たてまつりて、いとどしき思ひ添ひにける後、かの宮の小侍従がもとへ

柏木の権大納言

よそに見て折らぬ嘆きはしげれども名残恋しき花の夕かけ右 藤壺にて物のひまより、後の宮をほのかに見たてまつ

りけるあけほのに

権大納言

九重の霞の間より花を見てあはれ心の乱れ初めぬる

九十九番

左 宇治のみこかくれて後、常に住み給ひける所を見て

右大将

立ち寄らむ陰と頼みし権が本むなしき床になりけるかな  
右 藤壺の中將の君に

権大納言

袖のうらに波寄せかくるうつせ貝むなしき殻といつかなる  
べき

百番

左 限りに思ひなりにけるころ、京の母の夢に見ゆとて、  
おほつかなきことをいひ遣はしたりける返り事に

浮舟

後にまた会ひ見むことを思はなむこの世の闇に心まどはで  
右 世を背くとて書き置きける

権大納言

目の前にさらぬ別れを見せじとて四方の嵐にまどひぬるか  
な

左の三首は「源氏物語」の中でもよく知られた歌である。

詞書と相互参照すれば、すぐに物語内容が想起される。右の歌は散逸した歌であり、現在は詞書から場面を推測する

ことしかできない。しかし、その右歌は左歌と番えられている。番えられているということは、ふたつが別でもありながら、ひとつのかたちをも成しているということであり、ふたつは互いに干渉し合う。それは時に対立ともなるうが、と同時に補完ともなる。つまり、番としてあることでそこに現れる事物は全てが交わり合えるということである。そのため、物語そのものは見ることの叶わない「海人荊藻」の物語内容が、「源氏物語」によって補足され、うかがうことができる。「物語二百番歌合」が散逸物語の補助資料となる由縁である。そしてさらに、「物語二百番歌合」は「物語二百番歌合」としての読みをも示している。左右の歌そのものとその歌がひらく物語、そしてそれらの相互作用によって、何が見えるであろうか。

#### 四

「後百番歌合」九十八番は柏木と権大納言の歌である。詞書に、「女三の宮を見たてまつりて」（左）、「後の宮をほのかに見たてまつりける」（右）との表現があるように、左の女三の宮は、左歌の作者である柏木の思い人であり、右の後の宮も、右歌の作者である権大納言の思い人である。両歌はともに思い人を垣間見て詠んだ歌となる。

左歌の作者である柏木の思ひは周知のものであり、女三

の宮を垣間見るといふ物語内容とともに容易に想起することとならう。想起した思ひは、「いとどしき思ひ」との左歌の詞書の表現により強くなつたことが把握される。女三の宮を垣間見たことにより、柏木の思ひは増すのである。柏木の女三の宮に対する思ひは、垣間見る以前からであるとされている。「源氏物語」若菜上の巻<sup>10</sup>で、朱雀院が女三の宮の婿撰びに苦心する場面でも「右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられ」（若菜上・三五頁）と、柏木が宮を所望していることが記される。思ひがますます激しくなるのはそのためであり、左歌の「名残恋しき」との表現も思ひが募るためであると解せられよう。

対する右歌の作者である権大納言も、後の宮を垣間見ることと思ひを募らせている。しかし、柏木と違い権大納言が以前から宮を望んでいたとの描写は歌が収められている物語においては見受けられない。そのため右歌では「心の乱れ初めぬ」と表現され、垣間見によつて恋が始まつたと解されるのである。

ふたつの歌は、思ひ人を垣間見て詠んだという近似性を持つが、左歌の作者である柏木物語の高い知名度と、柏木の強い思ひにより、左歌が思ひをさらに募らせる歌、右歌が思ひ初めたばかりの歌として、異なる認識をされるであ

らう。

このように近似と相違を有しながら、番の歌は読みを提示する。そしてさらに、番の歌は歌を読むことだけでなく、歌が収められた物語をひもとくことを喚起する。右歌は散逸されており、現在では歌の収められた場面そのものを知ることができないが、左歌と対応することで周辺の場面をひらくことができる。その左歌は柏木が女三の宮を垣間見た場面を中心に読まれるであらう。以下は女三の宮を垣間見たおりの柏木の様子である。

御衣の裾がちに、いと補足ささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそばめ、いひ知らずあてにらうたげなり。夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。（中略）ましてさばかり心をしめたる衛門督は、胸ふとふたがりて、誰ばかりにかはあらむ、こころの中にするき桂姿よりも人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりておほゆ。

（若菜上・一四一～一四二頁）

思ひ続けていた女三の宮の姿に心を奪われている柏木の様子が描写されている。「海人荊藻」にも同じように垣間見る場面が描かれる。<sup>11</sup>

いまだ寝くたれの御さまながら、柳・桜の御衣、しどなげに着なして、脇息に押しかかりて、眺め出だし給へるまみ・口つきよりはじめ、光り輝くやうにけだかくうつくしげに、らうたさ言はんかたなし。(中略)宰相、御簾うち下ろしぬれば、付きの雲隠たらんよりも惜しく、残り多く、思ひ付きぬる心地す。

(卷二・八八〜八九頁)

垣間見た女御(九十八番右歌の詞書に記される後の宮と同一人物。以降、女御と記す。)の気品高い姿に心奪われている権大納言の様子が描写されている。「源氏物語」の場面と似てはいるが、柏木が以前から思いを抱いていた相手を垣間見たのに対し、権大納言は思いがけず女御を垣間見ているという違いがある。思いい人であった女三の宮を垣間見た柏木は、その後次のような思いを抱いている。

衛門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。(中略)宰相の君は、よろづの罪をもさをさたどられず、おほえぬ物の暇より、ほのかにもそれと見たてまつりつるにも、「わが昔よりの心ざしのしるしのあるべきにやとちぎりうれしき心地して、飽かずのみおほゆ。」

(若菜上・一四三〜一四四頁)

傍線部1で示した箇所には、柏木は昔から女三の宮を思慕していたことが記され、垣間見はそれが叶えられる前兆ではないかと感じていることが記されている。この盲目的な表現が柏木の強い思いを表しているといえ、女三の宮を以前から強く思慕していたと捉えられるのである。実際、女三の宮を垣間見る直前の記述にも次のようにある。

衛門督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひなれたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて、さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとは思しのためはせずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず。

(若菜上・一三五頁)

ここからも、柏木は以前から女三の宮を思慕していたと解せ得よう。権大納言は垣間見た後、次のような思いに囚われている。

まことや、院の新中納言は、<sup>5</sup>見ずもあらず見もせぬ人の御ありさまに心を碎き給ひて、方々より気色どり給ふをも聞き入れ給はず、独り住みにて明かし暮らし給ふを（後略）  
（巻二・九三頁）

見たとも見ていないとも言えないにもかかわらず、女御の姿に心奪われた権大納言は、縁談にも耳を傾けず独身を貫いている。思ひ人への思いのために、独身を貫いていたのは柏木も同じである。前出の朱雀院が柏木について述べる場面でも、「高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつ」<sup>1</sup>（若菜上・三六頁）と高貴な身分の妻を所望しているために独身でいることが記される。どちらも願ひのために独身でいるという点では変わらないが、権大納言が垣間見た後であり、思ひ人が女御であることが確実であるのに対し、柏木は垣間見る前から独身でいる。実は柏木の女三の宮に對する思いが頻出するのは、垣間見の場面の直前からであり、それより前の場面では、柏木の思いを伝聞するかたちで表現されるにすぎない。さらに加えるならば、柏木の思ひ人は女三の宮とは限らなかつたとさえ言える。柏木が独身である理由が、高貴な身分の妻を望んでいることは記されるが、それが女三の宮だとは明記されていない。柏木の女三の宮に對する思いは、垣間見という行為に臨むように

表され始めるのである。そして、その行為を経た後は、その思いをあらさまに吐露し始める。その中のひとつが「後百番歌合」の番に採られた歌が記される場面である。

督の君は、なほ大殿の東の對に、独り住みにてぞものしたまひける。（中略）この夕より屈しいたく、もの思はしくて、<sup>2</sup>いかならむをりに、またさばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかき紛れたる際の人こそ、かりそめにも、たはやすき物忌、方違への移ろひも軽々しきに、おのづから、ともかくもものの暇をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべきと胸いたくいぶせければ、小侍従がり例の文やりたまふ。  
「一日、風にさそはれて御垣の原を分け入りてはべしに、いとどいかに見おとしたまひけむ。<sup>3</sup>その夕より乱り心地かきくらし、<sup>4</sup>あやなく今日はながめ暮らしはべる」など書きて、  
よそに見て折らぬなげきはしげれどもなごり恋しき花の夕かけとあれど、一日の心も知らねば、ただ世の常のながめにこそはと思ふ。  
（若菜上・一四七―一四八頁）

柏木は傍線部2で書かれるように、どうにかして女三の宮に逢いたいとの妄執に囚われ、女三の宮の侍女である小侍従へ思いを綴った手紙を託す。その手紙の中の、傍線部3は注目される表現である。「その夕より乱り心地かきくらし」と柏木は述べている。心地が乱れ始めたのはその夕からである。言い換えれば、それ以前は今ほど乱れてはいなかったということを、自らが語っているということである。これは女三の宮への思いがなかったということではない。思いがかたちを形成して自らの中に現れ始めたのが、垣間見という出来事だったということであろう。垣間見は恋心を募らせるきっかけだったのである。

きっかけであることを示すように、手紙の中には傍線部4で示したように在原業平の次の歌が引かれている。

右近の馬場の引折の日、向ひに立てたりける車の下簾より、女の顔の、ほのかに見えければ、よむで、遣はしける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ  
(古今和歌集・卷第十一・恋歌一・四七六)

この歌は「伊勢物語」にも載る歌であるが、業平と目さ

れる男は、引折の日に女の顔を「ほのかに」見る。「ほのか」であるから、男は歌の中でその女を「見ずもあらず見もせぬ人」と表している。しかし、その見たとも見ていないとも言えない女を男は「恋しく」思い、「あやなく」「ながめ暮」しているのである。その思いを助長するのは、女を「ほのかに」しか見られなかったためではなかるうか。はつきりと見えないということとは、人物を人物そのものとして覚知していないにも関わらず、しかし、心残りというかたちになって自身の中に覚知される。心残り自身心のかき乱す要素となる。この歌は恋心を詠うと共に、恋するきっかけはふとした垣間見からでも良いということを詠っているとも言える。反対に、きっかけがなければ恋は始まっていないとも言えるかもしれない。

恋があるとあるきっかけによって始まることは「後百番歌合」九十八番の右歌が示している。右歌は詞書で「ほのかに見たてまつりける」と示し、歌で「霞の間より花を見て」心が「乱れ初め」と表現している。つまり、花を見たがために心が動き始めたのである。そしてその花は「ほのか」に見たものであり、また「霞の間」から見たものであるから、はっきりとはしていない。事実、先に示した「海人薺藻」の本文(九三頁)の傍線部5では、見たとも見ていないとも言えないと記している。それでも、見たという自覚

があれば事足りる。足りているから心が乱れ初めたのだ。この傍線部は同じく業平の歌の引歌である。業平が「ほのかに」見た女を恋し初めたように、「後百番歌合」の右歌も「ほのかに」見た女を恋し初めた。では「源氏物語」の柏木はどうであろうか。

業平の歌と「後百番歌合」の右歌のように、実は柏木も女三の宮を「ほのかに」垣間見ている。思いを確実なものとするには「ほのか」で充分なのである。垣間見という出来事に際する中で、柏木の心情が吐露されるようになるのはその証左である。思っている人を「ほのか」にでも見てしまったがために、欲望は加速する。垣間見る前は実体のない恋をしていたのであり、垣間見がなければ柏木があれほどまでに女三の宮への妄執に囚われることもなかったかもしれない。柏木は以前から女三の宮に恋していたのではない。垣間見という出来事によって女三の宮への恋を初めたのである。あるいは、垣間見たのが女三の宮だったが故に、柏木は女三の宮を恋し初めたとも言えるかもしれない。柏木の歌は、「後百番歌合」九十八番の左歌として右歌と番になることで、女三の宮への実際の恋を初めた元初の歌としての可能性を見せるのである。

## 五

現在、右歌の所収先である「海人荊藻」本文は、散逸しておりその内容をうかがい知ることはできない。しかし、「後百番歌合」九十八番の右歌として残っているおかげで、左歌の所収先と照合し、作者である権大納言の思いと左歌の作者である柏木の思いを重ねさせ、より強い思いとして感じさせるのである。現存本文では、この歌の後、権大納言は思いを遂げるべく女御の寝所に忍びこみ、女御は懐妊する。柏木と近似することは改めていうまでもなからう。どこまでも近似すること。それは見えなかったものを見せしてくれる大変興味深い作業であり、左歌が所収先が残りながらも右歌と番えられることで、それぞれの読みが交錯し、見えにくかったものを見せようとしたことに収斂される。左歌、右歌と独立し、それぞれ所収先を別としながらも番としてひとつのかたちを成しているため、左歌が右歌を補い、右歌が左歌を補っている。しかし、この二首は異なる物語場面に収められた、異なる歌である。異なることが明白であるから、左右の歌に勝敗をつけなくなる。歌合は本来勝敗を競う合せ物である。「物語二百番歌合」に勝敗は付されていないが、付されていれば読み手が歌を対立

させる意欲を無くしてしまふだろう。勝敗がないことも番である意味があり、番には常に補完と対立が示現するのである。<sup>12)</sup>

「物語二百番歌合」は物語歌を番えた歌合であり、歌が取められた物語には作成された年代の順序がある。しかしそれはあくまで物語が物語であった時の事実でしかない。「物語二百番歌合」の番を見る時、物語歌は「物語二百番歌合」を見る今に現れた、「物語二百番歌合」の番の歌となる。その今に、歌が取められていた物語の作成の順序は無効になろう。物語はあくまで歌の所収先である。そして、歌を読むためにひかれるものである。ただし、全ての事象は時の流れを経ながら連続してつながるものである。その連関性によって「物語二百番歌合」は読まれ、「物語二百番歌合」全体となるのである。

### 註

- (1) 本文と歌番号は、「風雅和歌集」については『新編国歌大観』に拠り、「古今和歌集」については『新日本 古典文学大系』（岩波書店）に拠った。
- (2) 「毎月抄」本文は、『新編日本古典文学全集 歌論集』（小学館）に拠り、該当頁数を併記した。
- (3) 共時的 (synchronic) とは、スイスの言語学者であるソ

シュールの用語であり、通時的 (diachronic) と対をなしている。通時的研究が言語の起源、発達、歴史、変化などを研究するのに対し、共時的研究は時間的流れを無視してある特定の瞬間における言語体系を研究することを目的としている。この視点の発見は言語学だけでなく、その他の人間科学の領域にも大きな影響を与えることになった。(川口喬一、岡本靖正編『文学批評用語辞典』研究社出版平14・7を参照)

- (4) 詞書は通常、「歌の詠作趣意を説明したもの」とされる。井上宗雄氏は『論集』題の「和歌空間」(和歌文学会笠間書院、平4)中の「詞書と題をめぐって」において、「詞書には、詠歌の場所(状況)説明、つまり作品享受のための必要性と、公的記録性があつたのである。」と論じている。

- (5) 歌の所収本文については、詞書などの情報から推測がなされている。蓋然性はあるが、あくまで推測にすぎないため現存しないとしておく。

- (6) 「無名草子」の本文は、『新潮日本古典集成』(桑原博史校注新潮出版)に拠り、該当頁数を併記した。「無名草子」において「海人荊藻」は長文にわたって評されている。

- (7) 室伏秀之「あまのかるも物語」(体系物語文学史 四物語文学の系譜Ⅱ 鎌倉物語Ⅰ)(三谷栄一編 有精堂、平元)。

- (8) 妹尾好信「海人の荊藻」私見「国文学攷 一二四」(平2・6)。

- (9) 「物語二百番歌合」の本文は、『王朝物語秀歌選 上』(樋

- 口芳麻呂校注 岩波文庫、昭62)に拠った。
- (10) 「源氏物語」本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠り、該当巻名と該当頁数を併記した。
- (11) 「海人荊藻」本文は、『中世王朝物語全集』(妹尾好信校訂・訳注 笠間書院)に拠り、該当巻名と該当頁数を併記した。
- (12) 山本美紀「『物語二百番歌合』の構想―示現する対立と補完―」『創価大学日本語日本文学 二二』(平24・3)

(やまもと・みき、白鷗女子高等学校講師)